

工房には6本の切り込みが入られた丸太が積まれている。この丸太はスウェーデントーチと呼ばれ、別名をウッドキャンドルという。切り込みの内部に着火剤を入れ、焚き付けを置いて燃やすだけで、北欧の伝統的な焚き火となる。大きなキャンドルのようなシルエットがおしゃれで、今注目を集めている。

「暖かい炎やパチパチと木のはぜる音は何とも言えないよね。心が癒されると思います」と石井さん。

スウェーデントーチは暖が取れるのはもちろん、明かりにもなる

から非常時にもいい。丸太の上にフライパンを乗せれば簡単な調理もできる。

「本来ならキャンプで使えば気分を盛り上げてくれるんだろうけど、今はコロナ禍だから、家族で火を見ながらのんびりと過ごすのもいいかもしれないね」

石井さんが地元の天然木を使ってテーブルやイス、電話台などをつくり始めたのは40年前。釧路市の男性に頼まれて、玄関で踏み台に使っていたコブ材を譲ったところ、立派なテーブルになって戻ってきたのがきっかけだ。

「いやーびっくりしたよ。ただの木も磨けばこんな立派に生まれ変わるんだって驚いたし、感動もした。木が持っている本来の魅力を、ちょっと手を加えることで、ここまで引き出すことができるだと思ったら、自分でもやりたくなって、木も喜ぶだろうと思ってね」

それから何年もテーブルを作った釧路市の男性のもとへ通い続けた。

「最初はなかなか教えてくれないんだよ。それでも5、6年通って根を詰めてやるうちに『お前には負けたな』って言って、教えてくれるようになった。それからだね、自分で作るようになったのは」

石井さんが作るテーブルやイス、スウェーデントーチはふるさと納税の返礼品にもなっている。

「もともと趣味で始めたものだから、儲けようとしてやってるんじゃないんだよ。以前、『テーブルを50万円で売ってくれ』って言われたことがあったんだけど、それはお断りした。お金のために作っているわけじゃないから。本当に木が好きの人には買ってほしいと思うけれど、金なら出すからよこせ、っていう感じの人には売りたいくない。ふるさと納税は、白糠町のためになればと思ってやっています」

石井さんは、木の形や模様など、その木の特徴をよく見て、どういう作品にしようかと考える時が一番楽しいという。

「どんな作品にしたらこの木が生きるかなって考えて、出来上がったときに、木がいい顔をしている作品が作りたいんだよ」そう言って笑う石井さんは、とてもいい顔をしていた。

石井 札造

いしい きつぞう

1953年1月1日生まれ。白糠町出身。白糠高校卒業。株式会社白糠チップセンターに勤務し、57歳で退職。その後は趣味を生かして、工房を営む。1980年に消防団員に入団。2019年に副団長に就任し、地域の安心・安全を守っている。趣味は釣り。



石井さんの作品の一部。石井さんはこれまでの技術の集大成として「チェーンソーアートをやってみよう」と話していました。

「木がいい顔をしている作品が作りたいんだよ」